

『真理論』によると、比は両項間にある限定された関係を生む。比例のアナロギアはそうした関係が神と被造物間に生じる可能性を唯一排除できるものであった (*De ver.* 2, 11, c.)。しかし、『神学大全』(I, 13) はこの点を全く顧慮せずに、神と被造物とに共通に言われる名称を比に従って論究しているように見える。著者はトマスにおけるアナロギア論の領域が論理的な次元にあることを指摘し、存在論の次元は領域外の問題として括弧に入れ、この難問に一つの解釈を与えた。その解釈の鍵となったのは表示様態に関する理論である。しかしその様態論は實在の次元を根拠として初めて論じられると見るべきであろう。その限り存在論を領域外の問題とすることは、問題の根拠の放置ということになる。テキスト間の異同が論争を生む問題領域であり、なお研究が必要だと思われる。

Simo Knuuttila:
Modalities in Medieval Philosophy

Routledge, 1993, pp. xiii+236.

渋谷 克美

オッカムは *Summa Logicae* 第一部第二十四章において、次の議論を提出している。

「存在する (*esse exsistere*) ということがその主語について言い表わされている命題が真であるにもかかわらず、次の命題は神のちからによって偽となることありうる。それゆえ、『実体は量を持っている』、『すべての火は熱い』、『人間は笑う』……はいずれも非必然である。」(OPhi, p.80)

すなわちオッカムによれば、例えば「火は熱い」という命題は非必然 *contingens* である。なぜなら神は、火が熱いという性質を持たないようにすることができるのであるから、たとえ「火は存在する」という命題が真であり、火が存在するとしても、「火は熱い」という命題は偽となりうるからである。あるいは *Summa Logicae* 第一部第二十六章においても、オッカムは次のように議論している。

「従って、『人間は理性的動物である』は無条件に非必然である。……なぜなら、

如何なる人間も存在しないとしたら、このような命題は偽だからである。ただし、アリストテレスは『人間は動物である』、『ロバは動物である』という命題が必然であると述べているのだから、彼はこのような命題を必然であると主張するであろう。」(OPhI, p.87)

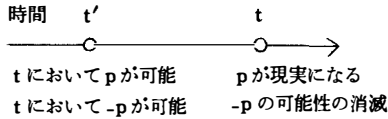
すなわち、「人間は理性的動物である」という命題はアリストテレスによれば必然 *necessaria* であるが、然しオッカムの立場では必然ではない。なぜなら神は人間が存在しない世界を造ることができるからである。このようなオッカムの「必然」、「非必然」といった様相概念は一体どのようなものであり、如何なる哲学的立場に基づくのか？ それはアリストテレスの様相概念とどの点で異なるのか？

Simo Knuuttila によって書かれた本書は、こうした疑問に明快に答えてくれる。著者はヘルシンキ大学の教授であり、様相概念に関する多くの著作 “*Reforging the Great Chain of Being*” (1981), “*Modern Modalities*” (1988) 等をすでに出版している。本書は次のような構成

- 1 Modalities in Aristotle and other ancient authors
- 2 Philosophical and theological modalities in early medieval thought
- 3 Varieties of necessity and possibility in the thirteenth century
- 4 Fourteenth-century approaches to modality
- 5 Medieval discussions of applied modal logic

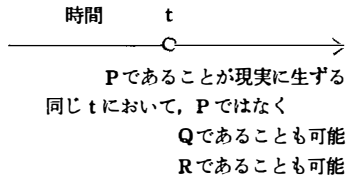
からなっており、アリストテレスから14世紀のドゥンス・スコトゥス、オッカムまでの様相概念の歴史的発展過程を論じている。

以下、本書の主要な論点を要約する。先ず第一章において筆者は、アリストテレスには三つの様相概念が見出されることを指摘する。一つは、常に生じ、変化しないものが「必然」と呼ばれ、或る時に生じ、或る時に生じないものが「非必然」と呼ばれるように、出来事が生ずる統計上の頻度によって様相を定める考えである (the statistical or temporal-frequency interpretation of modality, pp.1-18)。第二は、運動や変化における可能態という意味での様相概念である (the model of possibility as a potency, pp.19-31)。第三は、通時的な様相概念 (the model of diachronic modalities) である。この様相モデルに基づくならば、 t の時点では t において P であることも、 P でない ($\neg P$) ことも可能であるが、しかし後で t の時点で P が現実化された時には、 P でない可能性は消滅する。アリストテレスが



『命題論』第九章 (19a23-7) の中で「存在するものは、それが現実に存在する時に、必然的に存在する」(Aristotelian thesis of the necessity of the present) と述べているのも、この通時的様相概念に基づいている (pp.31-34)。

これに対して12世紀前半には、〈神は多くの可能な選択肢から自由に選択する〉というアウグスティヌスの神学上の説の影響を受けて、新しい共時的な様相概念 (the idea of modality as referential multiplicity with respect to synchronic alternatives) が登場する (第二章 pp.70-71, p.82)。この様相モデルに基づくならば、岡のごとくたとえ神が t の時点で多くの選択肢 (P, Q, R) から P を選択し P が現実の



世界において生ずるとしても、同時に同じ t において、Q であることも、R であることも可能である。この様相モデルにおいて Q が可能であるとは、Q であることが真である世界を考えることが矛盾を含まないということに他ならない。R に関しても同様である。然し12—13世紀においてはアリストテレスの様相概念が依然として大きな支配力を持っており、この新しい様相概念はほとんど普及しなかった (第三章)。

このような共時的な様相概念は、14世紀になってはじめてスコトゥスやオッカム達によって発展し体系化される (第四章)。すなわち例えば神は多くの選択肢から P (火は熱い) を選択し、それゆえ我々の現実の世界 W1 においては火は熱いという性質を持つ。然し同時にまた全知の神は、P ではなく Q である、つまり火が熱くない世界 W2 を考えることができる (p.156, 159)。この神の知性によって考察された、神の知性の中の *esse intelligibile* である Q は、それが存在すると考えることが矛盾を含まないという条件のみを満たすものであるがゆえに、*existens* よりも弱い存在の領域 (a priori transcendental area of what is intelligible, p.138, 148) に属

するものであり、論理的に可能な存在 *esse possibilelogicum* と呼ばれる (Scotus, *Ord. I, d.2, p.2, q.1-4, n.262, Vaticana II 282; I, d.36, q.un. n.61, Vaticana VI 296*). 著者によれば、こうした14世紀の様相理論は、スワレスを経てライブニッツやデカルトの永遠真理創造説といった近世哲学に影響を与え (p. 144, pp. 147-149), 更にまた現代哲学の可能世界意味論 (possible worlds semantics) ともきわめて類似したアイデアを持っている (p.138, 143, 149).

以上から、冒頭で述べたオッカムの *Summa Logicae* の議論に対する疑問も解決される。オッカムはスコトゥスと同様、新しい様相概念に基づき、アリストテレス以来の伝統的様相理論を再構成し、必然を自然的必然 (natural nomic necessity) と論理的必然 (logical necessity) に区分する (p. 138, pp. 155-157, pp. 159-160). 例えば我々の生きている現実の世界 (the actual world) においては火は熱いという性質を持つ。このことは我々の世界の自然の法則に基づく不変なことであり、その限りにおいて自然的必然性を持つ。然し同時にまた、火が熱いという性質を持たない世界が神によって考えられ、神が火を冷たいものにすることも可能である (cf. Scotus, *Ord. I, d.8, p.2, q.un., n.306; Vaticana IV 328*). それゆえ「火は熱い」という命題は、オッカムによれば、必然ではなく、論理的に非必然的な命題である。同様に、「人間は理性的動物である」という命題も自然的必然性を持つが、然し論理的には非必然である。人間が存在しない世界を考え、造ることが神には可能だからである。すなわち、〈論理的必然性〉とはすべての可能世界において成立する強い意味での必然 (strong necessity) であり、全知全能の神もそれを変えることができない。他方、〈自然的必然性〉とは或る特定の現実世界において成立している自然の因果法則に基づく弱い意味での必然 (weak necessity) であり、このような必然は神によって変えられることができるがゆえに、論理的には非必然である (pp.155-157). アリストテレスの第一の様相概念における、常に生じ変化しないものが「必然」と呼ばれるのはこの意味においてであり、従ってオッカムの様相理論によれば、このようなアリストテレスの言う必然は論理的には非必然である (p.160).

更に筆者は第五章において、このような様相理論の研究に伴って、その応用として生じてくる、「P を知っている」、「P を信じている」といった命題を扱う epistemic logic (pp. 176-182) や、「P を行なうべきである」、「P を行なうことを許されている」といった義務に関する命題を扱う deontic logic についても論じている (pp.

182-196).

最後に本書を読んだ書評者の感想を付け加えるならば、①新しい様相概念が14世紀のスコトゥスやオッカム達によって発展し体系化され、②その様相理論は現代の可能世界論ときわめて類似したアイデアを持ち、③それは、〈全知全能の神は多くの可能な選択肢から選択して世界を創造した〉という神学上の議論の影響を受けて成立したものであるという Knuuttila の主張は明快であり、興味深い。このような様相概念についての研究はおそらく、単に論理学だけでなく、スコトゥスやオッカムの哲学全体を理解するための重要な鍵になるであろう。Knuuttila が参考文献として挙げている André Goddu, *The Physics of William of Ockham* (Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters 16, Köln, Brill, 1984), Martin Kusch, 'Natural Necessity in William of Ockham' (in *Knowledge and the Science in Medieval Philosophy. Proceeding of the Eighth International Congress of Medieval Philosophy II*, Hersinki pp. 231-239, 1990), Douglas C. Langston, 'Scotus and Possible Worlds' (in *Knowledge and the Science in Medieval Philosophy*. pp. 240-247, 1990) といった著作や論文は、スコトゥスやオッカムの様相概念についての研究から、彼等の存在論や倫理学全体の解明へと向かう研究の方向を顕著に示している。

坂口ふみ著

『〈個〉の誕生 キリスト教教理をつくった人びと』

岩波書店, 1996年, xiii+302頁.

谷 隆 一 郎

本書が主として扱っているのは、東方・ギリシア教父の伝統におけるキリスト教教理、とくに神の子の受肉、イエス・キリストの神人性ないしヒュポスタシスの結合という教理の形成と展開の歴史である。だが著者はその複雑な経緯を、大方の教理史の枠組を遙かに越えて、古代ギリシア哲学以来の「一と多」、「分離と混合」といったアポリアをめぐる探究の動向と対比させつつ、ヒュポスタシス——それは本書ではあえ